

保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 22

『血の轍』

迫 ともゆ
(比治山大学)

押見修造氏の漫画、『血の轍』は、毒親や人格障害等の問題に関心のある人には得るところがある作品だと考えます。親子関係の闇についての、圧倒的なリアリティを持つサイコ・スリラーです。対人援助職の人に読んでもらいたいとは思いますが、一方で親子関係に課題があった方には、状況次第ではフラッシュバックが起こる危険性がある作品だとも言っておく必要があります。R18 指定にしておくべき作品とも思われます。

主人公は男子中学生の長部静一。母、静子は静一にべったりである一方、父の一郎はごく普通のサラリーマン。静子は一見すると、さえない一郎にはもったいないほど世間体のよい、きれいな奥さん。一郎は、静一からも軽く扱われている。静子にとっては静一こそが自分の生き甲斐で、親戚から「過保護」と言われるほどだった。

物語の冒頭、幼い静一は記憶の中で静子に手を引かれながら、道端で白猫の死骸を触っていた。「どうして死んじゃってるん？」と聞く静一に、静子はただ黙って満面の笑みを浮かべていた…。

夏休みのある日、静一と両親は、親戚一同のピクニックに参加した。静一と年代のいとこのしげる、しげるの母（一郎の姉）とその夫もいる。父の姉は遠慮なく思ったことを口にするタイプだ。

静一は崖でしげるに押され、あわてた静子が静一を抱きとめた。しげるの母から「何してるん？ 本当、過保護ねえ！」と笑われる。しげるがさらにふざけ、バランスを崩しかけたとき、静子は一旦抱きとめたしげるを崖に突き落としてしまう。静一の方を振り向いた静子は、冒頭と同じ満面の笑みを浮かべている。それはこの世のものと思えない、法悦の表情である。

一瞬ののち、我に返った静子は「きゃあー！」と叫び、静一に「みんなを呼んできて！」と告げる。親戚一同が血相を変えてしげるを助けようと手分けをする中、二人は崖に取り残される。静子は焦点の合わない目つきで、とりとめもない言葉を口走る。（第1集）

静子は母子分離ができず、静一を自分の延長のように捉えています。それだけでなく、心に闇を抱えているようです。死んだ白猫や崖での突き落としの場面での笑顔、その後の解離したような姿はそれを表しているように思われます。

静一は静子の思いに素直に従おうとします。母親の愛情を求めていた幼い日のまま。素直で健全な少

年の静一は、静子の闇に取り込まれていきます。

しげるは一命をとりとめたが、意識不明で長期入院となる。静子と一郎が、しげるの見舞いに行き、留守番をしていた静一のもとにクラスメイトの吹石が遊びに来た。吹石は静一に思いを寄せており、静一も吹石に惹かれている。

しかし二人の関係に気づいた静子は、吹石の存在を許すことができず、静一をコントロールして仲を裂こうとする。吹石は、静子にとって邪魔をする存在に他ならない。静一は静子と吹石のどちらを選ぶのかと迫られ、静子と一緒に吹石のラブレターを破ってしまう。母親に従う静一は、自分の気持ちが変わらなくなり、喋ろうとすると吃音が起こるようになる。（第2集）

吃音には様々な原因があると考えられています。親子関係のストレスによるとは言い切れません。ただ心理的なストレスがきっかけになる場合があることは事実でしょう。

思春期の静一と吹石は互いに惹かれあっています。親の立場としては、子どもが危なっかしい関係に走ることが気がかりなことは当然のことかもしれませんが、見守ることや手放すことも親としての課題となるはずです。場合によれば我が子が傷つくかもしれないし、相手を傷つけてしまうかもしれない。でもそうやって大人になるのだと我が子を信じ、距離感をとること、それが親子間の課題の分離には必要です。しかし静子はこの距離をとることができません。静子は不安定な自己愛を保つために静一を必要とします。

乳幼児期の静一は静子なくしては生きられませんでした。静子の愛情を求め、静子に認められるために一生懸命に振舞っていたはずですが。静子はその静一を手放すことができません。成熟し、思春期に向かう我が子を嫌悪し、自分の手元に置き続け、言うとおりにすることが正しいと教え込もうとするのです。

静一が離れていくと、静子は自分だけが取り残されてしまいます。いや、夫の一郎がいたはず。静子にとって一郎の存在は…？ 一郎は、その平凡さによって、静子が内面に抱える闇に気づくことはありません。静一の苦しみも、分かりやすくアピールしなければ気づけません。つまり静子にとって一郎は、自分の安全を脅かすことなく、コントロールできる存在、「いい奥さん」でいさせてくれる存在です。実は静子によって選ばれた最良のパートナーが一郎なのだと思います。

実際、「問題のある家庭において唯一の無害そうな人物」が、その家庭を表面的に維持させている隠れたキーパーソンである場合があります。平凡な父親は、静子と静一の母子一体関係の隠し味になっているのです。押見さんの漫画には、見た目にも同じような父親が登場する別の作品があります。「量産型」のお父さん。なんとも怖いものがあります。

吹石と一緒にいたい気持ちを押し殺す静一。吹石は「どうでもいいがん、お母さんとの約束なんて。長部はどうしたいん？」と問い詰める。静一は「もう好きじゃないから。吹石のこと。もう飽きた」と告げ、帰宅して静子に「約束を守った」と伝える。

しげるは回復して退院した。が、静子と静一の記憶は失われている。二人が見舞いに行ったしげる宅。歩行がおぼつかないしげるは足を滑らせ、静一が抱きかかえた。そのとき、しげるの記憶が蘇った。しげるは静子を指さし、「おばちゃんが、僕を…」と口にする。困惑したしげるの母は静子に、「しげる

を落としたなんてこと、ないやいね？」と尋ねる。とっさに静一はしげるの母を突き飛ばし、「だまれ！ ママをバカにするな！ しげちゃんは自分で落ちたんだ！ カホゴカホゴってバカにして！ 自業自得だ！ ふざけんな！」とまくしたてる。吃音だった静一は、一転して饒舌になる。（第7集）

静一は静子の気持ちを代弁するときだけは吃音が出なくなります。ただ母親の本心なのかどうかは分かりません。静一は母親の気持ちを先読みしています。過剰適応の結果、静一は自分の本心が分からなくなったのではないのでしょうか。

中学校のトイレ。鏡の前でクラスメイトの男子生徒らがふざけて静一の髪をセットする。いじられた静一は、友人の小倉を殴りつけ、眼鏡の破片が目刺さりかけるほど殴り続ける。静一は殴りながら「どいつもこいつも、死んでるくせに…」とつぶやき、静子のように笑みを浮かべる。

騒ぎを聞いて学校にかけつけた静子は、小倉の母と担任の前で、静一は吹石にたぶらかされておかしくなったと言い立てる。「どうせまぼろしだから、ごみだから…だからなぐった」とつぶやいた静一に、静子は帰り際、「ママもね、静ちゃんくらいんとき、おなじこと考えてたん」と伝える。（第8集）

母親に過剰適応した静一の心が「死んでる」のだと思われます。自分のことを大切に扱えないことが「ごみ」「まぼろし」という言葉になっているのでしょうか。そのことに気づけない静一はクラスメイトを「死んでるくせに」と言います。静子の世界観に同化することで、ようやく自分を肯定できた静一は、自他の境界が危うくなっています。

自分は無価値だ、ゴミクズと一緒にだ、自分の周りの人間も、この世界も価値はない、全て消えてなくなればいい…。こうした思いは時々、暴走します。何かのきっかけで自分自身が意識から消え去りそうに、危うくなる時、静子は静一を、しげるを崖から突き落としてしまうのです。静一が小倉を殴ったように。「こんな世界はどうせ、ごみだから…」。

幼かった静一も、かつて静子によって崖から突き落とされていた。白猫の死骸を見たのはその帰りだったようだが、静一の記憶は断片化して繋がらない。そうしているうちに、しげるの両親が静一の家に来て静子を警察に引き渡すことになる。静一は静子にすがりつくが、静子は「いいママになれなくてごめんね」と残して連れ去られる。静一は警察に取り調べを受け、「君はお母さんとは別の一人の人間だ」といわれ、逡巡しながらも、静子がしげるを突き落としたことを告白する。実況見分をきっかけに、静一には静子から突き落とされて怪我をした記憶がよみがえった。あの日、「わたしもう、きえることにする」と言った静子は「せいちゃんがさきね」と静一を突き落とした。全身を怪我した静一のもとに来た静子は「もういいや、かえるんべ」とつぶやき、帰宅する途中に白猫の死骸を見たのだった。（第8・9集）

「存在そのものを消したい」と思った対象は自分自身だったはずですが、自分ひとりが死ぬことの代わりに誰かを突き落とすことを、静子は選びます。自分が選んだというより、ひとりでにそうなったかのように本人は感じていることでしょう。すべてがゴミクズと一緒に、まぼろしなのであれば、誰が突き落とされてもいいはずですが、自分ひとりが死ぬのではなく、身代わりに誰かを突き落とすのです。そ

しておそらく、そのことは自覚されていません。

静一、しげる、もしかすると白猫も静子によって突き落とされたのかもしれませんが。突き落とされて傷だらけになった誰かを見ると、静子の心は少しすっきりして気分が晴れます。静子は何ごともなかったかのように日常に戻ることができます。

静子の心のメカニズムは、いじめや虐待をする人の心理と共通したものがあろうと推測されます。本当は心の中で自分が死んでいて、ゴミクズのような存在となっているのですが、その状態は苦痛に満ちています。自他の境界をあいまいにすると、受け入れられないものと共存することができます。しかしその状態から周囲を見ると、自分と同じくすべてがまぼろしで、死んでいるようです。それなのに、気づかずに楽しそうにしている他者が目に付きます。「死んでいるくせに」。そのことを思い知らせてやろうとして始まるいじめや虐待があろうと推測されます。

もう一段階先に、自傷行為が他者に向けたものがいじめや虐待であるという解釈があり得るでしょう。自傷は、自分がかかえる傷やストレスを、自分のものだと感じにくい人が、自分の身体の傷として外に見える形にする行為です。抱えきれない傷やストレスと共存するために、自身の身体を傷つけます。血を流す自分の身体を見て「ああ、こんなに自分は傷ついていたんだ」と安堵します。いじめや虐待は自分の傷つきを抱えきれない人間が、その傷を他者に押しつける行為ではないでしょうか。抱えきれない傷つきを外に向けたものがいじめや虐待であり、内に向けると自傷や解離、多重人格になるように思われます。

静子は静一やしげるに、静一は小倉に、傷つきのバトンを渡していくのです。しげるの意識が戻る前、静子は一郎と静一の前で「私…どうやったら出ていけるん？ やっと出ていけるって思ったのに…ぜんぶ…壊れてほしい」とつぶやきます（第7集）。

「ぜんぶ壊れてほしい」という衝動を持ち続けると、結局自分自身の生命を危うくしてしまいます。幼い自我が成長していくと、やがてこの衝動には小さな書き込みが現われます。「自分以外で」と。静子は、静一を、しげるを崖から突き落とすにしても、自分自身が身投げをすることはありません。他者の痛みを見て、感じることで衝動が落ち着けば、自分はきれいなままでいられます。一瞬でスイッチを切り替え、「かえるんべ」と言い放つことができます。

こうして「ぜんぶ壊れてほしい」はずだったのが、自分だけは温存し、周りを破滅に追いやる悪魔的な人格が現われます。絶望的な衝動を掘り下げようとするれば、闇の底に転落しかねないので、静子はそこから注意深く身をひるがえします。自分の深部に足を踏み入れない夫、一郎をそばに置き、わが身のように密着していた静一を利用し、切り捨てても自分の生存を選びます。本人の自覚の上では、それはひとりでのこったように感じられるでしょう。静子の衝動はまたどこかで疼きだし、つまらない日常を破壊するように蠢きます。

紹介作品：

押見修三（2017-2023）『血の轍』小学館

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com